OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	宮津市方言の原因・理由表現デ・サカイ ： 談話データにもとづく使い分けの実態
Author(s)	野間, 純平
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2017, 15, p. 22-35
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67210
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第 15 号（2017 年 11 月）22-35

宮津市方言の原因・理由表現デ・サカイ

―談話データにもとづく使い分けの実態―

野間　純平

【キーワード】宮津市方言、原因・理由表現、談話、デ、サカイ

【要旨】

京都府宮津市方言には、原因・理由の接続助詞として「デ」と「サカイ」の 2 種類が存在する。本稿では、この 2 形式の性質の違いを明らかにするために、1 人の宮津市方言話者の談話データをもとに、これら 2 形式の使用実態を観察した。具体的には、談話データの観察から、デとサカイの使用実態に関して、以下の傾向があることを指摘した。

（ア）デはサカイよりもナ・ネが後接しやすい

（イ）デとサカイが同一発話に共起した際、デのほうが外側に位置する

これらのことから、当該方言においては、デがサカイよりも文の外側の終助詞に近い形式として使用される傾向があると考えられる。

1.　はじめに

京都府宮津市方言（以下「宮津市方言」）においては、原因・理由の接続助詞として次のように「デ」と「サカイ」の 2 種類が存在する。

(1) テンキガ　エーデ　センタクモンガ　ヨー　カワクナー。

(2) テンキガ　エーサカイ　センタクモンガ　ヨー　カワクナー。

(1) と (2) はどちらも「天気がいいから洗濯物がよく乾くね」を宮津市方言に翻訳したものである。標準語の「カラ」（および「ノデ」）に当たる表現として、(1) では「デ」が、(2) では「サカイ」が用いられている。本稿では、この「デ」と「サカイ」が当該方言においてどのように使い分けられているのかを明らかにすることを目的とする。

ただし、本稿では、「デ」と「サカイ」の質的な違いを明らかにするところまでは及んでいない。これは、従来指摘されてきた観点では、両形式の性質の違いや使い分けの条件を明らかにすることが困難だということが面接調査によって判明したためである。その使い分けの条件を明らかにするためにも、まずは 1 人の話者の談話をもとに「デ」と「サカイ」の使用実態を記述しようというのが本稿の目的である。

本稿の構成は以下のとおりである。2 節では、本方言の原因・理由表現「デ」と「サカイ」の特徴を簡単にまとめ、両形式の文法的な性質の差が、従来指摘されてきた観点ではとらえられなかったことを述べる。3 節では、本稿で用いる談話資料についてまとめる。4 節では、その談話資料をもとにして、「デ」と「サカイ」の使用傾向を分析する。5 節はまとめである。

なお、本稿は、大阪大学大学院文学研究科の授業科目「社会言語学（特殊）演習」とし

て、2014 年度および 2015 年度に行ったフィールドワークの調査報告である。フィールドワークの概要については、白坂・高木（2015）を参照されたい。

2. 宮津市方言におけるデとサカイ

本節では、本稿において主な対象とする、宮津市方言のデとサカイの性質を簡単にまとめる。以下、2.1 節ではデについて、2.2 節ではサカイについてそれぞれまとめ、2.3 節では今回の調査において両者の文法的な違いが確認されなかったことを述べる。なお、本節の記述は、フィールドワークにて行った面接調査の結果にもとづいている。面接調査によって得られた例文はカタカナで表記し、標準語訳を付す。一部談話資料に現れた用例を引用するが、これについては 3 節で詳述する。

2.1. デについて

宮津市方言の接続助詞デは、述語に後接し、原因・理由の従属節を形成する。以下のように、動詞や形容詞、名詞に後接する。

（3）アカゴ　ネトルデ　シズカニ　セーヤ。(赤ちゃんが寝ているから静かにしろよ。)

（4）テンキガ　エーデ　センタクモンガ　ヨー　カワクナー。

（天気がいいから洗濯物がよく乾くね）　((1) 再掲)

（5）イマゴロ　ミャーニチ　アメダデ　センタクモンガ　カワカンナー。

（最近毎日雨だから洗濯物が乾かないね。）

（3）は動詞、（4）は形容詞、（5）は名詞[1] にデが接続する例である。

なお、当該方言には終助詞の「デ」も存在し、次のように使用される。

（6）191NOM：　京都の　ことばで、　「先生　キテデスカ」って　いう　ような　言い方は、　まあ　福知山とか　綾部とか

192HCM：　うん、　今は　言うで［↑］。　ときどき　そう　いうのを　言うけど。　（NOM：あー）　だけど　このへんの　ことばでは　ないわ　それは、（NOM：あー）　もともとは。　【nom】[2]

（6）では、調査者（NOM）が「先生キテデスカ」のようないわゆる「テ敬語」を使うか否かを尋ねており、HCM がそれに対して「今は言うで」と答えている。この「デ」は原因・理由を表す接続助詞ではなく、おおむね標準語の「よ」に相当する終助詞だと考えられる。このような終助詞の「デ」については、本稿の分析対象とはしない[3]。

1） 名詞・形容動詞述語の場合、デはコピュラ「ダ」に後接する。コピュラについては、宮津市の中でも宮津地区では主に「ヤ」が使用されるが、日置地区では主に「ダ」が使用される傾向にある。本稿の主な対象である HCM は主に「ダ」を使用する。

2） 用例に付した【　】は、その用例の出典を表す。詳しくは 3.2 節を参照。

3） ただし、談話データに出現した「デ」が接続助詞か終助詞かの区別が難しい場合もある。本稿では、標準語の「から」や「よ」に置き換えて意味が通るかどうかを判断するという手段をとったが、それで分類に迷う例は分析の対象から外した。なお、分析の対象から外した「デ」の用例数は、【nom】16 例、【csl】4 例、【att】2 例、【hon】17 例、【dan】17 例だった。

2.2.　サカイについて

サカイは、デと同様に、動詞、形容詞、名詞に後接し、従属節を形成する。以下に例を挙げる。

(7) アカゴ　ネトルサキャー　シズカニ　セーヤ。
　　（赤ちゃんが寝ているから静かにしろよ）

(8) テンキガ　エーサカイ　センタクモンガ　ヨー　カワクナー。
　　（天気がいいから洗濯物がよく乾くね）　　（(2) 再掲）

(9) イマゴロ　ミャーニチ　アメダサキャー　センタクモンガ　カワカンナー。
　　（最近毎日雨だから洗濯物が乾かないね。）

(7) (8) (9) は (3) (4) (5) とそれぞれ対応しており、デをサカイに置き換えたものである。

なお、(8) では「サカイ」、(7) と (9) では「サキャー」となっているが、これらは連母音 [ai] の融合[4] によって [sakai] > [sakjaː] となったものであり、両者はバリエーションの関係にある。他にも、以下の (10) のような「サカヤニ」や (11) のような「サカイニ」といった形でも現れるが、本稿ではこれらもまとめてサカイとする。

(10) 167HCM：　二日間だけ。　僕ら　若いさかやに　(HEM：うん)　「やれ」　言われたら　ずっと　やらんなん。　二日間も　続けて　やらされた。　【dan】

(11) 025HCM：　ほで　えー　なん　なん　なん一回か、　その　人たちが　その、あー　屋台　乗って、　(HEM：あー)　ま　僕らは　その　当時は　まんだ《まだ》　子供ださかいに、　(HEM：うん)　それを　見て、　ほで、　かーっとこう　長い　笹が　笹を　こう、　が　屋台に　こう　付いとる　やつが　(HEM：うん)　かーっと　いくと　電線が　あって　引っかかっちゃ《引っかかっては》　そりゃ《それを》　(HEM：うん)　ずりゃーっと　やって　取ったん　覚えとんだけど　【dan】

2.3.　デとサカイの違い

冒頭で述べたように、宮津市方言においては原因・理由を表す接続助詞として、デとサカイが使用されている。そのことは遠藤 (1982) や中井 (1997) などでも指摘されているが、両者の意味や機能の違いについては明らかにされていない。そこで、本フィールドワークでは、デとサカイの文法的な性質の違いを明らかにすることを目的として調査票を作成し、面接調査を行った。調査票の作成にあたっては方言文法研究会編 (2010) を参考にし、70 歳代および 80 歳代の宮津市方言話者男女 13 名に調査を行った。

しかし、この面接調査では、デとサカイの文法的な性質の違いを明らかにすることはできなかった。方言文法研究会編 (2010) では、原因・理由表現の調査項目として「後件のモダリティ制限」「理由を表さない用法」「述語用法」「従属節内のモダリティ表現」「文末用法」などの観点が挙げられているが、どの観点においてもデとサカイの決定的な違いを

4)　本フィールドワークでは、連母音の融合に関する調査も行っている。詳細は小田 (2016) を参照。

見出すことはできなかった[5]。例えば、「後件のモダリティ制限」とは、主節である後件のモダリティによって使用される接続助詞が異なるという仮説である。しかし、宮津市方言のデとサカイに関して言うと、(3) や (7) のように聞き手に強く働きかける場合と、(4) (5) (8) (9) のように述べたてる場合のどちらにおいても、デとサカイともに使用可能であり、使用できる形式に差はない。また、標準語の「から」と「ので」とでは違いがある「述語用法」についても、以下に示すようにデとサカイのどちらも使用可能である。

(12) アンダケ　ノム｛デ／サキャー｝ダ。(あんなに飲むからだ。)

(12) では、「から」相当節にコピュラの「ダ」が後接し、述語となっている。この場合、当該方言ではデもサカイも使用される。さらに、従属節内にモダリティ形式を含むか否かという点においても、デとサカイとで差はなかった。

(13) アメ　フルラシー｛デ／サキャー｝　カサ　モッテコ。
(雨が降るらしいから、傘を持っていこう。)

(14) アメ　フルダロー｛デ／サキャー｝　カサ　モッテコ。
(雨が降るだろうから、傘を持っていこう。)

(13) では「らしい」、(14) では「だろう」に相当するモダリティ形式が従属節内に含まれているが、デとサカイのどちらも使用可能である。

ただし、提示された調査文に対してデで回答するかサカイで回答するかには個人差があり、使用の可否を確認しても、その判断には個人差が見られた[6]。さらに、その個人差は男女差や地域差で解釈しがたく、1 人の話者の中でもゆれているのが実情であることが判明した[7]。

以上のことから、本稿では、仮に、宮津市方言における接続助詞デとサカイは意味・機能を同じくするバリエーションの関係にあるものとして分析を進める[8]。ただし、この調査結果をもって、デとサカイの間に文法的・意味的な性質の違いがないと結論づけたわけではない。形式の使い分けに個人差があり、個人の中でもゆれているのであれば、話者に内省を求める面接調査よりも、話者の発話から当該の用例を集め、その使用実態を記述してみるべきだと考えたのである。それによって、調査票に新たな観点を持ち込むことが可能になるだろう。そこで、本稿では、対象を 1 人の話者に絞って、デとサカイの使用実態

5) これには、調査上の問題も関係していると思われる。すなわち、複文を提示して方言に翻訳してもらうという方法をとっているため、提示された長い複文を最初から最後まで翻訳するのが話者によっては困難になることがあるためである。この問題に対しては、話者に極力負担がかからず、より確実な調査方法を検討する必要があるが、本稿では、談話データを使用することでこの問題点を補うという方法をとった。

6) どの話者においても総じて「言えない」という回答はあまりなく、すべての質問に「どれも使える」と回答する話者もいた。

7) もちろん、多人数を対象とした社会言語学的調査も必要となるだろう。

8) なお、デは格助詞由来、サカイは形式名詞「境」由来とされており、それぞれ出自が異なっている。また、原因・理由を表す接続助詞の諸形式の新古関係を地理的分布と文献から推定した彦坂 (2005) によると、歴史的にはデのほうが古く、サカイのほうが新しいという。このような両形式の出自および成立時期の違いが使い分けに関係することが考えられるが、少なくとも面接調査の結果からは、その違いは観察されなかった。

を観察することを試みる。次節では、その際に使用する調査資料について述べる。

3.　調査資料

本節では、本稿で用いる調査資料についてまとめる。以下、話者について（3.1 節）と談話資料について（3.2 節）、それぞれ述べる。

3.1.　話者

本稿では、宮津市方言を話す 1 人の話者の発話を分析の対象とする。対象とした話者は、1931 年生まれの男性 HCM である。HCM は宮津市の日置地区[9] に生まれ、現在まで宮津市内で生活している（23 歳から 48 歳まで宮津地区に居住しており、それ以外の期間は日置地区に居住している）。

本稿において分析の対象を 1 人に絞ったのは、ひとまず個人差を排除したうえでデとサカイの使い分けの実態を観察するためである。両形式の性質の違いを明らかにするために様々な話者のデータが必要であるのは確かだが、本稿はその最初の試みとして 1 人の話者におけるデとサカイの使用実態を記述するものである。

また、HCM を分析対象に選定したのは、以下の理由による。

① 対調査者の面接調査だけでなく、地元の話者同士の自然談話の録音も行っている
② 調査者が相手でも極端にあらたまった標準語になることはなく、デとサカイの使用も安定して見られる

①に示すように、HCM は面接調査にも談話調査にも参加している。本フィールドワークでは、調査者と話者が 1 対 1 で話す面接調査を中心に行ったが、地元の話者同士で自由に会話をしてもらい、それを録音する談話調査（調査者は同席しない）も一部行った。HCM はその両方に参加しているため、本稿においてその両方のデータを用いることで、場面による形式の使い分けという観点での分析が可能になる[10]。

②は、HCM の発話からは、面接調査であってもデとサカイの用例をある程度採集することができたということである。一般的に、よそから来た調査者が相手だと、普段使っていることばが出にくく、あらたまったことばになりがちである。HCM においてもその傾向がないわけではないが、本稿の対象とする原因・理由表現に関して言えば、相手が調査者の場合と地元の友達の場合とで方言形と共通語形を明確に使い分けているとは言えず、どちらの場合も主に方言形を使用する。そのため、対調査者の面接調査でも、デとサカイの用例を確保することができる[11]。

以上の理由から、本稿における分析の対象を HCM に絞った。次は、使用する談話資料についてまとめる。

9）調査地についての詳細は、白坂・高木（2015）を参照されたい。
10）ただし、今回の HCM のデータにおいては、面接調査と談話調査とでデとサカイの使用傾向が大きく異なるということはなかった。このことは、4.1 節で述べる。
11）もちろん、そもそも原因・理由表現が談話内にどれだけ現れるかということは別の問題である。

3.2. 談話資料

本稿で用いる談話資料は以下のとおりである。

表1 調査資料一覧

談話ID	話者	収録時間	収録時期	概要
nom	HCM	1時間20分23秒	2014年9月	準体助詞に関する面接調査。
csl	HCM	36分45秒	2015年9月	原因・理由表現に関する面接調査。
att	HCM	18分33秒	2015年9月	言語意識に関する面接調査。
hon	HCM	39分58秒	2015年9月	待遇表現に関する面接調査。
dan	HCM HEM	35分53秒	2014年9月	nomの直後に収録した自由談話。 HEMはHCMの後輩。

nom、csl、att、hon はいずれも調査票を用いた面接調査の録音である。調査者はすべて筆者であり、他に同席者はいない。nom は準体助詞およびノダ文について尋ねたもので、csl はまさに本稿で対象としているデとサカイについて尋ねたものである。att は、近隣の地域とのことばの違いについて尋ねたものである[12)]。そして、hon は待遇表現について尋ねたものである。これらの談話においては、間に雑談が挟まれることはあるものの、基本的に調査者が質問して HCM がそれに答えるというやりとりが繰り返される。このうち、本稿で分析の対象とするのは、話者が内省して作った例文ではなく、自然な発話の中に現れたデとサカイの用例である。したがって、話者が方言翻訳した回答文のように、メタ言語的に使用した用例は分析の対象としない[13)]。例えば、次の例がそれに当たる。

（15）294HCM :「ワリーンダデ」。 （NOM : はい） うん まー それ 「ワリーンダデ」 ゆう ことは も 相手は、 体調 わりーよと《悪いよと》 ちゃんと その人に **伝えとるさかい** 「ワリーンダデ」と こう なるんだろうし 【csl】

（15）は、「ワリーンダデ」（悪いのだから）という表現について HCM が考えを述べている場面である。ここで HCM は「ワリーンダデ」を 3 回言っているが、これはメタ言語的に引用されたものであると考えられるため、分析対象としてカウントしない。一方、3 行

12）言語意識調査についての詳細は上林（2016）を参照されたい。

13）談話資料から用例を引用する際には、おおむね文節単位で分かち書きし、読みやすさを考慮して漢字かな交じりで表記する。ただし、回答部分や引用などのメタ言語的な発話はカタカナ表記とする。用例の末尾の【 】には談話 ID を入れて示している。話者 ID の前の 3 桁の数字は、談話ごとにつけた発話番号であり、談話内の NOM は調査者（筆者）である。その他、談話内の記号の意味は以下のとおりである。

、	ポーズ	。	発話末
（ ）	話者交替のないあいづち	「 」	引用およびメタ言語的発話
《 》	その文節の標準語訳	‘ ’	読みが複数ある漢字の読み方
［↑］	上昇イントネーション		

目のゴシック部分「伝えとるさかい」の「サカイ」はメタ言語的なものではないため、分析対象としてカウントする。

一方、dan は調査者が同席しない、地元の話者同士の自然会話である。会話の相手である HEM は 1941 年日置地区生まれ（外住歴なし）の男性で、HCM の後輩に当たる。話題に困ったときのための話題リストを渡した以外は、特にこちらから話題を指定していない。なお、HEM によるデやサカイの用例は、分析の対象外としている[14)]。

以上のような談話資料から、HCM が用いた原因・理由のデとサカイの用例を採集した。次節では、その使用実態を記述する。

4.　デとサカイの使用実態

本節では、談話データをもとに、宮津市方言話者 HCM におけるデとサカイの使用実態を観察し、それが意味するところを考察していく。具体的には、デとサカイの使用に関する特徴として、以下の 2 点を指摘する。

（ア）デはサカイよりもナ・ネが後接しやすい

（イ）デとサカイが同一発話に共起した際、デのほうが外側に位置する

これをもとに、HCM がデとサカイをどのように使い分けているかを考察する。

本節は以下の構成で進める。まず 4.1 節で、調査資料に現れた原因・理由表現の使用頻度を示し、デとサカイの使用頻度に大差がないことを述べる。次に、個別の用例に注目して、上記の（ア）と（イ）について 4.2 節と 4.3 節でそれぞれ指摘する。そして、それを踏まえて 4.4 節ではデとサカイがどのような規則で使い分けられているのか考察する。

4.1.　談話におけるデとサカイの使用頻度

表 1 のデータから得られたデとサカイの用例数を以下に示す。本稿で注目するのはデとサカイだが、標準語形であるカラとンデの用例数もあわせて示している。なお、空欄は当該の用例が出現しなかったことを表す。

表 2　談話データにおける原因・理由の接続助詞の用例数

	デ	サカイ	カラ	ンデ	計
nom	18	7			25
csl	7	5			12
att	3	4	1		8
hon	7	4			11
dan	14	21	1	4	40
計	49	41	2	4	96

この表からは、HCM が面接調査と談話調査のどちらにおいても、原因・理由の接続助

14）ちなみに、dan において使用されたデやサカイの多くは HCM によるものだった。

詞に関しては基本的に方言形を使用していることが読み取れる。一方で、標準語形であるカラとンデは数例見られる程度である。このことから、HCM の原因・理由表現については、相手が地元の親しい友人の場合と調査者の場合とで方言形と標準語形を使い分けているわけではなく、ほぼ一貫して方言形を使用していると言える。

では、方言形であるデとサカイの量的な分布はどうだろうか。表 2 を見ると、nom ではデのほうが多く、dan ではサカイのほうが多いというように、談話ごとに多少の差はある[15]ものの、全体を通して両者の量的な差はほとんどないと言える。

4.2. ナ・ネとの共起

ここからは、個々の用例に注目して、デとサカイの使用傾向の違いを観察する。本節では、ナ・ネの後接という点において、デとサカイとで差があることを指摘する。

本稿で対象としているデとサカイは接続助詞であり、次の用例のように、後に節が続くのを基本とする。

（16）316HCM： まー **他人だ<u>さかい</u>** 「モットンナルナー」とも （NOM： はーはーはーはー） 言うし うん。 【hon】

（17）934HCM： ほんまんなー もー アクセント、 ほんま 生まれた ときに体が、 に 染みついた アクセント （NOM： うん） やっぱ ポンポン **しゃべる<u>で</u>**、 （NOM： うん） あー この 人は 栗田の あそこの 人だなーって （NOM： うん） わかったけどな。 うん。 【nom】

（16）は、ある人物について「重そうな荷物を持っているな」とつぶやく際に「持っている」の部分をどのように言うかを尋ねられた際の発話である。ゴシック部分の「（荷物を持っている人が）他人だ」が、後に続く「「モットンナルナー」とも言う」の理由となっている[16]。また、（17）では、デの前の「体に染みついた（地元の）アクセントでしゃべる」が、後に続く「この人は栗田（宮津市内の地名）のあそこの人だなーってわかった」の理由になっている。面接調査において提示した文の多くは、このように 2 つの節が連なった形であり、接続助詞の直後に何も続かず、主節が続いている。

しかし、HCM のデータには、ナ・ネが接続助詞に後接する次のような例が多かった。

（18）441NOM： じゃあ その、 えーっと 昔からの この、 えー 丹後の ことばだったら、 え 「イキヨッタ」って 言わずに 「イキクサッタ」って
442HCM： うん その 腹 立って （NOM：はいはい） 言う ことばと しては まー そ 全部が 全部 そうじゃ ないけど、 一番‘いっちばん’ 悪い **ことばだ<u>でなー</u>**［↑］ 「イキクサッタ」とか。 【nom】

（19）060HCM： うん。 あー でも （NOM：うん） ほんでも やっぱしー、 ああ あのときでも そうだけど、 （NOM：はい） こう やって しゃべっと

15）この差が何を意味するのかという点に関しては議論の余地があると思われるが、今後データを増やしたうえで考えたい。

16）「モットンナル」の「ナル」は宮津市方言で用いられる素材待遇形式である。詳細は、酒井（2015,2016）を参照されたい。

ると、ると　なんか　こう　意識　**するでねー**［↑］。
061NOM：　はいはいはいはいはい。
062HCM：　ほんでー、　ことばが　ちゃんと　出とらんかも　わからへん。
【csl】

（20）088HEM：　中学ん　時か［↑］。
089HCM：　僕らー　ちゅうがくー《中学》なんてーんの《中学なんていうの》**あらへんさかいな**　（HEM：うんうんうん）　6年生　5年生　6年生の　頃だ、（HEM：はー）　小学校の。　【dan】

（18）では、デに終助詞「ナ」が上昇調で続いており、（19）では「ネ」が上昇調で続いている。また、（20）では、サカイに「ナ」が続いている。

このような、接続助詞に終助詞が続く表現自体は特に珍しいということもなく、標準語や他の方言にも存在する。しかし、HCM のデータに関して言うと、以下の表からわかるように、原因・理由の接続助詞にナ・ネが続く表現が使用される頻度には、デとサカイとで差がある。

表3　デ・サカイに後接するナ・ネの用例数

	デ			サカイ		
	ナ	ネ	なし	ナ	ネ	なし
nom	1	8	9		1	6
csl	1	3	3			5
att	1		2			4
hon	2	1	4	1		3
dan	11		3	2		19

表3は、デとサカイそれぞれにナまたはネが後接する用例の出現数を談話ごとに示したものである。表の左半分は、デの用例においてナおよびネが後接する例とそれ以外との内訳であり、右半分はサカイの用例に関するものである。「なし」は、当該の接続助詞にナもネも後接しない用例を指す[17]。空欄は、当該の用例が出現しなかったことを表す。談話ごとに出現頻度の差はあるものの、ナ・ネが後接するのはほとんどがデであることがこの表からは読み取れる。

では、このようにナ・ネが後接する例がサカイよりもデに多いことは、何を意味するだろうか。本稿ではこれを、デがナ・ネと組み合わさって終助詞のようになっていると解釈してみたい。その傍証となるのが、本稿のデータにおいて、接続助詞にナ・ネが続く場合、直後にその帰結が続かずに終わる例や、直前で既に述べている、つまり倒置の例が多いこ

17）直後にナおよびネが続かないことを意味するのであって、必ずしも直後に発話が続かないことを表しているわけではないが、他の助詞が後接する用例はなかった。

とである[18]。例えば、(18) は接続助詞の後に帰結がない例である。一方、子供のころ遠泳をしたという話をしている (20) では、「遠泳をしたのは中学のときか」という内容の HEM の発話に対して、「当時中学なんてなかったから、小学 6 年生のころだろう」という意図で HCM が発言している。この発話において、「中学なんていうのはない」が直後の「(遠泳をしたのは) 6 年生のころだ」の理由となっており、直後に帰結が続いていると言える。(19) では、「意識する」の帰結である「ことばがちゃんと出とらんかもわからへん」が調査者のあいづちと HCM の「ほんでー」を挟んで現れている。しかし、あいづちはともかく、「ほんでー」を挟んでいるという点で、(20) とは少し性質が異なる。これは、「ほんでー」以降を後から付け加えたように解釈できる。そして、表 3 に含まれるナ・ネが続く用例の中で、(20) のように直後に帰結が述べられる例は (20) を含めて 5 例だった。このことから、「デナ」「デネ」は文中よりも文末に位置する傾向にあると言える。つまり、デはサカイよりも、ナ・ネを伴って「文末」に位置する傾向が強いと言えるだろう。ただし、表 3 からわかるように、デの用例の中には、ナもネも伴わない用例 (「なし」の列) もほぼ同数 (dan を除く) 存在する。このことを考えると、デは接続助詞として文中に現れるだけでなく、「文末」にも現れるというのが正確なところだろう。

また、ここで「文末」のように括弧つきで表記したのは、必ずしも「後に何も続かない」という意味ではなく、「後に帰結の節が続かない」ことを便宜的に「文末」と呼んでいるからである。例えば、次の例を見てみよう。

(21) 027NOM : その 言われた ことなんかは ないですか。 「それ 日置弁だなー」なんて いうのは。
028HCM : んー それー まー も だいたい **似とるでなー** (NOM : あー) みんな うん。 ま いち ま 日置弁は 日置に おるさかい 日置弁 言うけど、 (NOM : はい はい はい) だいたい まー 宮津ー この、 丹後弁とも 言うし (NOM : はー はー はー はー はー はー) んー。 どうだろうなー あんまり 違わんなー。 【att】

(21) では、調査者が「日置弁ならではの特徴」があるかどうかを尋ねており、それに対して HCM が「だいたい (他の地域のことばと) 似とるでなー」と答えている。そして、この「でなー」の直後に「みんな うん」が続いており、そこで発話末 (句点) となっている。この点において「でなー」は必ずしも文末にあるわけではない[19] が、それよりも帰結の節が続いていないという点をここでは重視し、「文末」としている。これは、ナ・ネが

18) 白川 (2009) では、従属節で終わる文を「言いさし文」として、その内容によって「言い残し」と「言い終わり」の 2 つに分類し、「言い終わり」をさらに「関係づけ」と「言い尽くし」に分類している。同様のことが宮津市方言の原因・理由表現にも言えるかどうかの検討が必要であることを考えて、本稿ではこの分類には言及しない。

19) ナ・ネを間投助詞と考えて、「デナ」「デネ」を文中の要素として解釈することもできると考えられるが、本稿ではその考え方をとらない。それは、本稿のデータでは宮津市方言のナ・ネが終助詞なのか間投助詞なのかの判断が難しいためである。また、どちらであっても、後に帰結の節が続かないという点をやはり重視したい。

後接した接続助詞が終助詞のようになっていると解釈するためである[20)]。

以上、本節では、ナ・ネが後接する用例について、サカイよりもデに多く、それをデがナ・ネを伴って終助詞のようになっていると解釈した。

4.3.　複数の原因・理由節の共起

次に、同じ発話内で原因・理由を表す節が共起した場合について観察する。具体的には、以下のような例である。

（22）148HCM：　あのー　ま　兄弟では　言わんだろうけども　親戚で　親しい（NOM：ふんふんふん）　おじさんだとか、　まー　そんな　普段　しょっちゅう　まー　**田舎の　ことださかい　そういう　人ら　か　常に　こー　交流があるでね**［↑］、　（NOM：　ふん　ふん　ふん　ふん）　うと、　今の　ような　その　「ドコ　イットンナッタンデァ」とか。　（NOM：　ふん　ふん　ふん　ふん）　ほんまに　対等ぐらいん《対等くらいに》　なると　「ドコ　イットッタデァー」と　こう　なっちゃう。　【nom】

（22）は、「どこに行っていたの」を方言翻訳してもらう際に、相手によってことばづかいが異なるという話をしている場面である。この例のゴシック部分「田舎の　ことださかい　そういう　人ら　か　常に　こー　交流が　あるでね」には、サカイとデの両方が使用されている。ここでは、2つの原因・理由節が並列になっているのではなく、「田舎のことだ」が「そういう人らと常に交流がある」の理由になっており、それら全体にデがついて原因・理由節になっていると分析できる。つまり、以下のように、デ節の中にサカイ節が入った構造になっていると言える。

（23）［［田舎のことだ**サカイ**］そういう人らと常に交流がある**デ**］

このような、原因・理由節の中にさらに原因・理由節が埋め込まれる構造は、書きことばではテ形を使うなどして避けられる傾向があるが、話しことばにはときどき現れる。その際、HCMの発話では、外側はデ節、内側はサカイ節になっている例が他にも見られる。

（24）250HCM：　んー　いやー　言わん　ことも　ないけど、　まー、　**だいたいは　普通　標準語的な　ことばん《ことばに》　なってきとるさかいに、**　（NOM：ふんふんふんふんふんふん）　**「モー　イヌルンカー」　ゆて《言って》　言うのは、ときどき　聞く　聞く、　ことばん《ことばに》　なっとるでねー**［↑］　**もう。**　【nom】

（24）は、「イヌル」ということばを最近使うかどうかを尋ねられたHCMが答えている場面である。このゴシック部分でもデとサカイが両方使われていて、その構造は次のように解釈できる。

20）もちろん、今回のデータの中には、ナ・ネが後接していないが、接続助詞で言いさしている、つまり帰結の節が続かない用例もあった。このことから、ナ・ネが後接する用例の少ないサカイが「文末」に立つ傾向が否定されるわけではないと言える。本稿は、あくまでデがナやネと合わさって終助詞のようになっていると解釈できるということを述べているのであって、このことを否定しているわけではない。

(25) [[だいたいは標準語的なことばになってきている**サカイ**]「モー　イヌルンカ」というのは時々聞くことばになっている**デ**]

ここでも、サカイ節がデ節の中に埋め込まれ、それが前に出てきた節の理由になっている。同様の例を以下に掲げる。

(26) 177HCM：　ほったー　やっぱし　違った　ことを　教え　教えられとるわ。（HEM：ほうですか）　誰が　ほんな　こと　教えたんかな　思って。（HEM：ええ）　まあ　誰も　知っとれへん　分からへんで　ほんな　もん。（HEM：うんうん）　うん。　ほで　あのー　**そゆう　ことが　あるさかいにー　まあま　正しい、　正しい　ことを　上手下手は　別に　して**（HEM：**うん**）　**正しい　ことは　やっぱし　ちゃんと**（HEM：教えて　もらわなんな　うん）　**引き継ぐ　引き継ぐんなら　引き継がんならんでなー**《引き継がなければならないからな》。　【dan】

(27) 164HCM：　だけど　まあ、　その　その　「モドルデ」とか　「モドルサキャー」とか　ゆて《言って》　そう　いう、　あのー　「デ」と　いう　こ　ことは　あんま　言わん　時代が　あったかも　わからんのかなー（NOM：　あー）　子供の、　ときだったら。　（NOM：　あー）　「モドルサキャー」、が　普通だったかも　しれんわ。　**今でこそ、　ちと　大きに《大きく》　なっとるさかいにー、**　（NOM：　んー　　ふんふんふん）　**その、　ことばが　だいぶ　変わって　きとるで　ほんで　も　そ　そう　なっとるかも　わからんでなー**［↑］。　うん。　【csl】

(26) は、地域に伝わる祭りの際の囃子や口上が、出典となった物語とは異なっており、それを間違ったまま教わっていたという話をしている場面である。ゴシック部分においては、サカイ節の「そういうこと（＝伝承を誤って伝えている）がある」がデ節「正しいことは引き継がなければならない」の理由になっており、やはりデ節の中にサカイ節が埋め込まれた構造になっている。(27) も同様である。ここでは、「モドルデ」と「モドルサキャー」のどちらを使うかという話の中で、成長とともに使用する表現が変わっているのかもしれないと HCM が内省している。「今でこそ大きくなっている」のが「ことばが変わってきている」の理由であり、それがさらに「そうなっている（＝成長に合わせて自分のことばが変わっている）」の理由として続いている。ここでは、デ節の中にデ節が埋め込まれ、さらにその中にサカイ節が埋め込まれている。

原因・理由節が別の原因・理由節の中に埋め込まれている用例は以上の 4 例だが、いずれにおいても内側でサカイが、外側でデが使用されている。この関係が逆になっている例は見られなかった。

4.4.　HCM の談話データにみるデとサカイの使い分け

以上、HCM の談話データをもとに、デとサカイの使用実態を観察してきた。そして、以下の 2 点を指摘した。

（ア）デはサカイよりもナ・ネが後接しやすい（4.2 節）

（イ）デとサカイが同一発話に共起した際、デのほうが外側に位置する（4.3 節）

本節では、これらが意味するところについて考えてみたい。結論から述べると、上記の（ア）（イ）から、HCM におけるデとサカイの使い分けについて、以下のような傾向があるのではないかと考えられる。

（28）HCM の発話におけるデとサカイの使い分け傾向

デとサカイはどちらも接続助詞だが、デはサカイに比べて文の外側にある終助詞に近い形式として使用される傾向がある。

このことについて、まず（ア）との関連で考える。4.2 節で述べたように、HCM の発話におけるデとサカイのうち、ナもしくはネが後接している用例がデに偏る。そして、「デナ」「デネ」は文末の終助詞のように使われていると解釈できる。つまり、サカイよりもデのほうがより終助詞に近い形式と位置づけられているのではないかという仮説が立てられる。

次に、（イ）について考える。4.3 節で述べたように、HCM の談話では、原因・理由節が共起した場合、内側にサカイが、外側にデが現れる傾向がある。これはつまり、サカイよりもデのほうがより文の外側、文末に近いところに現れる傾向があるということであると言える。ただし、2.3 節で指摘したように、本フィールドワークで調査した限りでは、デ節とサカイ節に含みうる要素に違いは見られなかった。そのため、現時点では、あくまで使用傾向であると述べるにとどめておく。

5. まとめ

本稿では、宮津市方言における原因・理由の接続助詞デとサカイを取り上げ、その違いを明らかにすることを試みた。ただし、方言体系内における文法的・意味的な性質の違いを明確な形で明らかにするのではなく、1 人の話者の様々な発話データから両形式の使い分けの傾向を探るというアプローチをとった。デとサカイの明確な性質の違いを明らかにできたわけではないが、これまでに指摘されていない違いにつながりうる使用傾向の違いを明らかにした。本稿では調査対象者を 1 人に絞ったため、ここで立てた仮説が他の話者にも適用できるか、今後検証していきたい。

なお、本研究では、宮津市方言話者同士の自然談話だけでなく、対調査者の面接調査談話もデータとして使用した。方言の文法研究では、調査票にもとづいた面接調査を行うことが多いが、通常データとして扱うのは、質問に対する回答部分のみであり、それ以外の発話は補助的なデータとして言及される程度である。これは、話者が方言で話すコミュニティの外からやってきた調査者を相手に話す場合には、普段のことばではなく標準語などあらたまったことばになるという予測にもとづく。

しかし、本稿で取り上げた HCM のデータでは、少なくともデとサカイの使用に関して、相手が地元の人か調査者かで切り換えられるということはなく、調査者が相手でも方言形を使用している（4.1 節の表 2 を参照）。もちろん、同じ地域であっても、人によって、あるいは言語項目によって状況は異なると考えられる。だが、本稿で行ったように、話者や項目を選べば、方言記述に有用なデータとして活用できる。そこには様々な問題が付随すると考えられるが、各地の伝統方言の記述が急がれる現在の状況において、調査のたびに

蓄積されていく面接調査の録音データは非常に貴重である。過去に行った調査の談話を用いることで、より古い時代の、今ではもう話されなくなった方言の手がかりにもなる。今後も、様々な観点から分析を進めることで、方言記述のための資料としての有効性を検証していきたい。

【参考文献】

遠藤邦基（1982）「京都府の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 7　近畿地方の方言』pp.87-112，国書刊行会.

小田佐智子（2016）「宮津市方言における連母音融合の特徴」『阪大社会言語学研究ノート』14，pp.1-11，大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.

上林葵（2016）「宮津市における言語意識調査の報告」『阪大社会言語学研究ノート』14, pp.53-66，大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.

酒井雅史（2015）「宮津における素材待遇形式ナル」『阪大社会言語学研究ノート』13, pp.16-27，大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.

————（2016）「宮津における素材待遇形式ナル（2）―適用範囲と感情性待遇―」『阪大社会言語学研究ノート』14，pp.27-35，大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.

白川博之（2009）『「言いさし文」の研究』くろしお出版.

白坂千里・高木千恵（2015）「宮津フィールドワーク概要」『阪大社会言語学研究ノート』13，pp.10-15，大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.

中井幸比古（1997）「総論」平山輝男ほか編『日本のことばシリーズ 26　京都府のことば』pp.1-26，明治書院.

彦坂佳宣（2005）「原因・理由表現の分布と歴史―『方言文法全国地図』と過去の方言文献との対照から―」『日本語科学』17，pp.65-89，国立国語研究所.

方言文法研究会編（2010）『全国方言文法辞典資料集（1）原因・理由表現』科研費研究成果報告書.

のま　じゅんぺい（島根大学講師）

jp-nom@soc.shimane-u.ac.jp